opusdei.org

親の権威

子どもたちに、自由を尊重することと規則を守らせること を両立させるのは簡単ではない。この記事は、家庭教育につていくつかの提案を勧める。

2014/11/12

神は命の主であり、すべての権威の 源であるが、権威を振われる際には 憐れみを存分に示される。被造物の 権威はこの神の権威から来ている。 その中に親の愛のこもった権威もあ る。親の権威の行使には、確かに困 難がつきまとうことがある。親は 日々の生活の細かいことにまで口出 しをすることは避けられない。子供 を教育しようとするとき、「行動や 生活にルールがなく、日々の生活の 細かいことを子供の好き勝手にさせ るなら、その性格を形成すること も、大人になって遭遇するであろう 試練に立ち向かうための準備をする こともできなくなる| (ベネディク ト16世、2008年1月21日の講話) という経験は誰にもある。しかしな がら、私達は自由を尊重することと 規則を守らせることを両立させるの がそう簡単ではないことも知ってい る。実際、多くの親は、おそらく彼 ら自身がその経験をしているのだ が、子供に何か強制することからよ くない結果が生じるのではと恐れて いる。例えば、家族内の平和が損な われたり、子供がそれ自体は良いこ とも受けつけないようになったりす るのではないか、と。

権威の光

権威を行使することと、ただ相手に自分の意見を押しつけることや無理 矢理にでも従わせるということとは別 である。一定の権威者に従うのは、 罰を恐れるからというより、たとえ それが理解できないときがあって も、その権威者が何が正しく何から いのかを教えてくれると感じるから である。権威は真理を示すという意味で、真理と深く結ばれている。

こういうふうに考えると、権威はこ の上なくポジティヴな意味を持ち、 奉仕であることがわかる。つまり、 権威は何かを探す人を導く光と言え る。実際、語源的には、権威 autoritasはラテン語の「成長する、 発展する」という言葉augereから派 生している。権威を認める人は、な によりも権威者が示す価値や真理に 接近するのだ。「教育者とは真理と 善を証しする人です」(ベネディク ト16世、前掲講話)。言い換えれ ば、人が探し求める真理をすでに見 つけ、自分のものとした人のことで ある。他方、教育される側は、教育 者を信頼する。それは単にその人が 多くのことを知っているからだけは なく、それらの真理に達するように 自分を助けてくれると感じているか らである。

親の役割

子供たちが明らかに親に求めている ことは、言うことと行うことに矛盾 がなく、自分たちに愛を示してくれ るということである。子育てのため に親が必要とする権威と評判はいか にして得ることができるのだろう か。権威は親子の関係の中で自然に 生まれる。ゆえに、権威をいかに獲 得しようかと心配するより、いかに それを保ち上手に使うかに心を配る べきである。親子の間で権威が自然 牛まれることは、特に子供が小さい とき明らかだ。もし家族が一致して いるなら、子供たちは自分よりも親 に信頼を置く。親の言うことを聞く のは抵抗を感じることもあるが、家 族の一致と暖かさの中では子供はそ れを自然に受け入れる。つまり、両 親は自分を愛していて、自分が幸せ になることを望んでいて、そうなる ように助けるために言ってくれるの だと考えるので、自然に従うのだ。

そうなると、不従順は何かおかしい こととして、信頼と愛に欠けている こととして、理解される。

というわけで、権威を強めたけれ ば、親は本当の親になる以外のこと を試みる必要はない。つまり、生き ることが喜ばしくすばらしいことだ と示し、あるがままの子供たちを愛 していることを行いで見せるのであ る。当然のことだが、そうするため には家にいる必要がある。現代社会 の生活リズムではそれは容易なこと ではないが、子供たちと一緒に時間 を過ごすこと(『そして親になる』 で電気屋さんが言っていた)、「神 と人々に対する愛と敬虔の心で満た された家庭環境を作り出すことし (第二バチカン公会議「キリスト教 的教育に関する宣言 | 3) は大切 だ。例えば、家族一緒に夕食をする ように努めることは、たとえかなり しんどいことであるにしても、価値 がある。それは、家族のみんなが互

いに知り合うすばらしい仕方である。子供たちは、その日にあった出来事を話し合いながら、両親の話を聞きながら、何か問題があっても、それを大げさに考えないことを学ぶ。

このような会話の中で、その上、必 要ならば、子供たちにはっきりと何 が善で何が悪かを示し、そして子供 の年齢に合わせて、なぜこうする か、こうしないかの理由を説明する ことが容易になる。なぜある行いを するかの理由の中で、神の子として 振る舞うという理由も教える必要が ある。「子供たちが神の御前で自分 の行動を考えることを学ばせなさ い。彼らに超自然的な理由を教え、 自分の行動について自分で考え、責 任を感じるようにさせなさい」(聖 ホセマリア、1972年11月17日の団ら ん)。権威を行使するとは、つまる ところ、小さいときから子供たちに 人間として成長するために必要な材

料を提供することである。最も大切な材料は生きる模範を見せることである。子供たちは親のすることを逐一見つめ、それを真似ようとするからだ。

権威を行使することは、家庭の温か さを守るために必要な決定を下すこ とと、受けるより与える方が喜ばし いことであることを子供たちが発見 させることに表れる。この意味で、 子供たちが小さいときから、互いに 心配りができる雰囲気を作るため手 伝いの仕事を任せることが役に立 つ。各自に担当の仕事を与える。例 えば、例えば、テーブルの準備をす る、一定の時間を使って家の片付け をする、ベルが鳴ったらドアを開け に行くなどなど。それらは家族みん なが気持ちよく過ごせるために役立 つことで、子供たちもそれを理解で きる。ただ何かをさせるために仕事 を与えるのではなく、子供が自分が していることが家のためになってい

る (親の仕事を代わりにするから、 兄弟を助けるから、家の何かを世話 するから・・) ことを理解させ、自 分に任せられた仕事であるという責 任を感じさせるためである。こうし て従うことを学んでいく。

親は子供と話すだけで十分役目を果 たしたというわけではない。彼らに 誤りを犯した場合、その過ちの意味 と影響を理解させねばならない。事 が起こる前、あるいは起こった後 で、親は子供に注意をし、彼らがす ることが彼ら自身と他の人たちに悪 い影響を与えることを教えるのであ る。多くの場合、やさしくはっきり した言葉で足りるだろう。しかし、 時には、反省だけでは足ら、償いを 必要とする場合もあり、その時には 何らかの処置を講じるべきである。 罰は犯した悪事を償う手段となるべ きである。例えば、何かを壊した場 合、それを賠償するために小さな什 事をさせるのも一つの可能性だろ

う。時には償いにある程度時間かけ た方がよい場合もある。例えば、学 校の成績が悪かった場合、一定の期 間、外出を禁じることが良いかも知 れない。しかし、この場合も、この 措置がしなければならないこと(勉 強)をするために必要な時間と手段 を捻出するためであることを忘れて はならない。この場合、外出はしな いが、家でぶらぶらしているなら意 味がない。あるいは、その必要はな いのに、ただそれに行きたがってい るからという理由で、それ自体よい 活動(形成の手段とか)にも参加す ることを禁じることもいかがなもの かと言わざるを得ない。

信頼と権威

親が子に伝えたいと望む大切なことを、子供の自由と個性を尊重しながら理解させることも親の権威の一部である。このためには、第一に子供が親から愛されていると感じるこ

と、そして親が自分のいうことを理 解してくれると感じること、つまり 子供が親を知り親に信頼することが 求められる。これはしても良い、あ れはしたらだめと、何ができて何が できないかを明確に示すことは、も し愛情と信頼が伴っていなければ、 おそらく絶えず口答えを引き起こす だけで役に立たない。「親が権威を 持つことは教育のために欠かせない が、それは子供と同じレベルにまで 下りていくことによって子供の友達 になることと完全に両立します。子 供たちは、最も反抗的で愛想のない 子供さえ、親と親しくなりたいと望 んでいるのです| (聖ホセマリア、 『対談』、100)。

子供が成長するにつれ、親の権威は ますますこの信頼関係の有無に左右 されるようになる。子供は誰でも親 が自分に対してまじめに接してくれ ることを必要としているが、思春期 の子供はなおさらである。彼らを当 惑させる肉体的精神的変化に遭遇 し、その変化の中にいることを示 す。自分からは認めないが、自分の 参考になる大人を探している。しっ かりした考えを持ちたい、首尾一貫 した生活をしたいと望むので、それ を体現している大人を求めている。 これとともに、大人になるという仕 事は自分以外にできる人はいないこ とも感知している。それゆえ、親の 言うことを無批判に受け入れること はしない。これは親の権威を疑って いるというのではなく、その裏付け になる真理をよりよく理解すること を助けてくれと頼んでいるからだ。

そのために、彼らに必要な時間を割くこと、一緒にいる機会を作り出すことが重要である。車でどこかに一緒に行くこと、テレビの番組や学校での出来事を種にして会話を始める。そういう機会に、彼らが関心を持つテーマについて、明快な考えを要する重要なテーマについて話すこ

とができる。ときどき子供たちはそ の会話に興味を示さないように見え ても心配するには及ばない。父親 が、うるさく言うことを控え、また 無理に相手に話すよう強要せずに、 必要なことだけ話すなら、その話は 子供の頭に残る。後で子供が親の助 言を実行に移すかどうかは問題では ない。大切なのは、子供があるテー マについての親がどう考えているの かを確認でき、自分がどのように行 動するかを決める際のヒントを得る ことである。父親は子供のそばにい て、彼が関心を持っていることにつ いて話す用意があることを示した。 それは教皇の次の教えを実践したこ とになる。「私達の持っているもの を互いに与え合いましょう。私達の 時間を互いに与え合いましょう」と いう勧めである(ベネディクト16 世、2012年12月24日の講話)。

親が子供にノーと言って許可を与えないことのいくらかは、実際は対し

て重要ではなく、言い合いをするほ どのことでもなく、短いコメントを すればそれで終わるはずのこともあ る。そのようにすれば、子供は自分 の価値観を自分で作り上げていき、 重要なこととそうでないことを区別 することを学ぶ。親が望んでいるこ とは、自分たちが親と同じような大 人になることではなく、幸せになる こと、一人前の社会人になることだ と発見するだろう。それゆえに、親 は子供の尊厳や家族に直接関わりの ないことなら、それに興味を示しは すれど、干渉することは控える。つ まるところ、子供を信頼するという こと、「(子供が)自由を悪用する 危険を無視することなしに、子供た ちが間違った考えや決定をした場 合、それを正すことを助けようと身 構えていることです。反対に決して してはならないことは、彼らの過ち を見てみるふりをすることで、まし てやそれを肯定することは言語道断 です」(ベネディクト16世、2008 年1月21日の謁見)。

子供はこういうふうに信頼されてい ると実感すれば、その信頼を裏切る ことはできないと考える。問題は 「親が子供を家庭的な雰囲気の中で 育てることができること、子供に不 信感を与えないこと、彼らに自由を 与えると同時に、個人的な責任を もって正しく使うことを教えるこ と。時には子供にだまされたままで いる方が望ましい場合もあります。 子供に信頼しているなら、子供自身 がその信頼を裏切ったことを恥じ入 り、自ら改めるでしょう」(聖ホセ マリア、『対談』100) である。親 子の間では、当然小さな喧嘩や不仲 は時には起こるだろうが、平静さを 失わずにユーモアをもって対処する ことが可能だ。そうすれば子供たち は、あることをダメと言われても、 親の愛と理解には何ら変わりがない と知るだろう。

聖ホセマリアは子育ての任務は夫婦 両方の肩にかかることを強調した。 もちろん、彼らだけがそれを担うの ではない。子供を天国に導く使命を 与えた神がその任務の遂行を助けて 下さる。それゆえ、親になるという 召命は子供たちのために祈るという ことを含む。神との対話(祈り)の 中で、子供たちについて、彼らの徳 と欠点について話したり、どのよう に彼らをよりよく助けることができ るかを尋ねたり、また彼らのために 恵みを、また自分のために忍耐を頼 んだりするのだ。教育の実りを神の 御手に任せることができれば、心の 平安が生まれ、それは周囲にも広が るだろう。教育の仕事においては、 聖ホセマリアがある母親に忠告した ように、「乱暴なことは避けて柔和 に行動しなければいけません。お母 さんたちはそれをするための聖なる ずるがしこさと、神の特別の恵みを お持ちです。それは身分の恩寵とい うものです。いつもご主人と同意の

上で行動し、ことがうまく行くように神に願い、小さな犠牲を捧げ、自分の性格を制御するようにして下さい。そうすれば、子供たちは変わるでしょう。心配無用です」と。なんと言っても、子供たちは神のものなのである。

(注、ベネディクト16世の2008年 1月21日の講話と2012年12月24日の 講話の邦訳は、『霊的講話』にも司 教協議会のホームページにも掲載さ れていない)

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/oya-no-keni/ (2025/12/19)